

『アカデミック・キャピタリズムを超えて—アメリカの大学と科学研究の現在』
上山隆大著／NTT 出版

現在、大学（university）と呼ばれる制度は中世の欧州に遡ることができる。最古の大学組織とされるのはイタリアのボローニャ大学で、本書の著者によると、学生たちが教授陣に講義内容や学費に関する要求を突きつけるための学生団体（ユニベルシタス、universitas）にその起源がある。すなわち、教授の下に学生たちが集まり、彼らの共同自治組織として形成されていったのだ。日本国憲法第23条にも保障されているいわゆる「学問の自由」が具体的には「教授（教育）の自由」および「研究の自由」「研究発表の自由」を指すゆえんだ。

第12回「読売・吉野作造賞」を受賞した本書は、はしがきでいきなり、次のように一見、“挑戦的”な問いかけで始まる。

本書で扱っているテーマは、大学研究の特許化に代表されるような、知識生産への市場経済の浸透、大学そのものの商業化、大学資源の市場化などである。近年においてこの動きはアメリカにおいて顕在化し、ほとんど普遍的な力を持って、世界中の国々の大学組織へ浸透し始めている。この流れは伝統的な大学の役割を根底から覆してしまうのだろうか？

日本の大学もこうした流れには逆らえず、文部科学省に叱咤激励され、先行するアメリカを「周回遅れ」で追いかけているのが現状ではないだろうか。

それは、見方を変えれば我が国の経済界の要求でもある。先端科学知識を生み出す場としての大学研究への期待と大学への変革を迫る要求は根強い。著者によれば、その背景にはグローバル化する経済の進展がある。1989年11月のベルリンの壁の崩壊に象徴される東西冷戦体制の終焉により始まった世界経済の『大競争時代』において、技術革新（イノベーション）を絶えず引き起こし、他国（の企業）に比べて優位性を保つことは国の消沈がかかる至上命題となっており、大学に寄せる期待は高い。

アメリカの大学は、素朴な古典教養主義から研究大学への変貌を遂げてきた。そうした中で、「研究と教育の一体化」が進められるようになった。

こうした流れの中で、著者はアメリカの大学における産学連携の現状について

も言及している。まず、アカデミアと産業界の関係について誤解があると指摘。そのうえで、次のように述べている。

産学連携は大学の知識を民間に売り渡してしまうことであるとか、大学を単なる私企業へ変化させるとか、企業が自らの活動の一部を大学にアウトソーシングしているにすぎないといった見方は、アメリカの知的風土の歴史を見る限り、一面的に過ぎない。むしろ、アメリカにおけるアカデミアと私的部門のかかわりは、かの国の知的風土の長い歴史の中で培われてきた結果であって、第二次世界大戦後の科学至上主義・研究至上主義の象牙の塔の時代の方が、むしろ一時期の出来事に過ぎなかった。近年の変化はその意味で伝統的なアメリカの知識と社会との関係に戻ったのだといってもいい。その根底には、大学こそが新たな知識や技能を作り出せる機関なのだという強い信念がある。

本書のユニークさは、大学研究の商業化や産業化を「悪」と単純に決めつける反市場主義でも、象牙の塔としての大学批判でも捉えきれない、アメリカの大学の歴史に裏打ちされた、知識を創出する拠点としての力強さを評価している点である。

ハーバード大学（17世紀創立）をはじめとする米国（東部）の大学はもともと英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学で当時行われていたような、幅広い知識をカバーする教養主義的な教育を若者に授け、「ジェントルマン」を育成することを目的に創立された。具体的にはギリシャ語やラテン語、哲学、歴史といった古典的な教育を通じた、豊かな人間形成を大学教育の根幹に据える思想が根付いていた。その後、アメリカでは産業の発展に伴い、工学や農学、医学など実学的な学問を教える大学が増えていった。もともと、アメリカでは素朴なプラグマティズムとその結果としての反知性主義が根付いていたとみられる。これに対して日本でアカデミアが産業化に加担することを嫌悪する大学人は依然として多いようだ。こうした中で、アメリカでは素朴な古典教養主義から研究大学への変貌の大きな流れの中で「研究と教育の一体化」が進められてきた。

著者は、大学とは「基礎研究も応用研究もなく、実学と虚学の違いも存在せず、それぞれの研究者が新しい知識の開拓を目指して集まっている場所である」と位置付け、「その内部での相互関係とネットワークによって、どこかで生まれ出る新たな知識技術を拾い上げていく組織、それが現在の社会における大学に求められている姿である」と主張している。

著者は近年の日本における大学改革の動きに批判的である。例えば、「国立大学が進みつつある市場化の方向は、アカデミアが本来なすべき知識の創造の役割を確認することなく、雑巾を絞るように研究資金を削減するという圧力によって、アカデミアと市場との関係を知識の売却の方向へと向かわせつつある」と手厳しい指摘を行い、それは、市場化が多様性と開放性を生み出すことの期待とは全く異なる結果へと進んでいると嘆いてみせた。

本書は、アメリカにおけるアカデミアの歴史を概観することは、今後の日本における大学の在り方を考える上で一助になりうることを期待させる労作だといえよう。

執筆者紹介

村上 直久

情報・経営システム工学専攻准教授（平成27年3月退職）。専門領域は、国際関係論、メディア英語論。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『アカデミック・キャピタリズムを超えて：アメリカの大学と科学研究の現在』
上山隆大著 NTT出版 2010年 3,456円

[ブックガイド目次へ](#)